

『小説神髓』に見る異文化交流——「小説」概念の〈翻訳〉現場で起こったこと

西山 康一

1. はじめに

坪内逍遙の『小説神髓』は明治18〔1885〕年9月から翌年4月まで、松月堂から9冊に分かれて刊行された(翌月合本発行)。その『小説神髓』について、たとえば『日本現代文学大事典』(明治書院、1994・6)には、次のような解説がある。

小説の近代的意味と機能を論じた最初の創造的理論として、近代文学史上の起点たる意義は動かない。方法としての近代写実主義をいうにとどまらず、小説の全体像に及ぶ理論の広さに意味がある。(中略)逍遙における小説革新は、洋学の知識をテコとして日本物語伝統の全体を組みかえる作業を基本とした。また、そのことは、逍遙がその最深部に物語理解を置く教養全体、「洋」「漢」「和」の各知識断層に自覚の垂直軸を下ろすことでもあった。

確かに、ここで指摘されているように、『小説神髓』で逍遙がやったこととは、「洋学の知識をテコとして日本物語伝統の全体を組みかえる作業」＝「小説」という概念の〈翻訳〉——比喩的にいえば、「洋」「漢」「和」の小説に関する様々な種類の知識の糸を、一つの布に“編み上げてゆく”行為だった、といえるかもしれない。が、そのためむしろ、その結果生まれてきた理論を実際に読むと、いろいろな意味で「小説の近代的意味と機能を論じた」や「近代文学史上の起点」といった言葉では収まりきらない、雑多な要素が含まれており、現代の我々から見ても不思議な違和感を覚える点が少なくない。

特にその違和感の中でも、最も大きなものの一つが、他の文学ジャンルに対する〈小説〉¹の特権化であろう。後に詳しく見てゆくが、『小説神髓』の中で〈小説〉は「文壇上の最大美術の其随一」と位置付けられる。これは当時の散文＝戯作といていた日本においても、あるいは逍遙が主に参照した英語圏の文学理論においても、ある意味特殊であったようだ。亀井秀雄『「小説」論 『小説神髓』と近代』(岩波書店、1997・9)によれば、当時は英語圏でもウォルター・ベザントやヘンリー・ジェイムズが、やっとな小説も芸術の一つと言いだした時期であるという。また、逍遙が直接参照したと語る、フェノロサの『美術真説』や菊池大麓『修辞及華文』(Chamber's Information for The People の Rhetoric and Belles-lettres の翻訳)、バインの『英作文及び修辞』(English Composition and Rhetoric)

¹ 『小説神髓』では「小説すなわちノベル」といい、後述するように「^{ロマンス}奇異譚」等とは異なるものとして、限定的な意味で「小説」という言葉を使っている。念のため、あらかじめことわっておく。

などでも、芸術に数える文学はあくまで詩歌であり、小説ではない。

どのようにして逍遙は、『小説神髓』において〈小説〉を文学シーンの「其随一」に押し上げたのか。本小稿では、その論理と背景をたどってゆきたい。

2. 『小説神髓』における〈小説〉の特権化と社会進化論

『小説神髓』上巻の最初の章である「小説総論」で、〈小説〉が芸術の一分野であることをいうために、逍遙は「まづ美術(=今でいう芸術一般——西山注)の何たる」かから説明する。〈小説〉自体を論じ、定義し、特権化してゆくのではなく、まず〈小説〉が芸術の一つであることから説明する必要がある——このこと自体、当時小説全体がいかに低く見られていたかを指し示していようが、それはともかく、逍遙はそこで「美術の種類さまざまなる概ねかくの如しといへども、其主脳とする所をとへば、みな是れ眼を娛ましめ、心を悦ばしむるに外ならざるなり」という答を提示する。そうした芸術の定義を提出し、〈小説〉をいったん芸術に加える処理を施した後、今度はその芸術全体を以下のような形で分類してゆく。

『小説神髓』における「美術」の分類

- (1) 「有形の美術」～はめき 絵画・彫刻・嵌木等²：「形を主として人の眼に訴」えるもの
- (2) 「無形の美術」～①音楽・唱歌：「耳に訴」えるもの
②じょうふり 詩歌・戯曲・小説：「心に訴」えるもの
- (3) 上記の(1)(2)「二種の質を併せ」持つもの～舞踏・演劇：「心目を娛ましむ」るもの

この、いわゆる美術系・音楽系・文学系・舞台(総合芸術)系という分類自体は、今でも用いられるものだが、しかしたとえば美術系・音楽系といえども、眼や耳という感覚を通して、最終的には「心に訴」えるものといえる。つまり、ここではどの感覚を媒介とするかとどこにそれが到達するのかが混同されており、その分類基準に関しては怪しいものといわざるを得ない。

しかし、そうした分類基準を前提として『小説神髓』ではさらに、文学系に関しては「主として心に訴ふるが故に、其主脳とする所のものも、色彩にあらず、音響にあらず、他の形なくまた声なき人間の情即ち是なり」という飛躍——仮に「心」に訴えるとしても、だからといって「心」＝「人情」を扱わなければいけないことにはならないはずだ——のもとに、文学系の取り扱うべきテーマ・対象まで決定づけてゆく。つまり、〈小説〉自体を見てゆき定義づけするというよりも、他の芸術ジャンルとの差異化の中で、ある意味怪しい分類基準と飛躍によって、かなり強引な形で“〈小説〉さらには文学全体のテーマ＝「人情」を描く”という、有名な『小説神髓』の〈小説〉・文学概念が抽出されてくるのである。

² この他「おりもの 繡織銅器建築園冶等」といったものも挙げられている。

そして、最終的にその〈小説〉を含む文学概念をもとに、〈小説〉が他の文学系を超えて（あるいは他の芸術ジャンルも含めて）「文壇上の最大美術の其随一」と特権化されることになる。

倅何者が此世の中にて最も描きがたき者ぞと問はむに、彼の人間の情慾ほど描き難かるものはあらず。喜怒愛悪哀懼欲の七情も其皮相のみを表はさむはさまでむづかしきことにあらねど、其神髓を見えまくほりせば画工の力もて及ぶべくもあらず。否、俳優の手を借るともなほ写しがたきこと多かり。（中略）畢竟、小説の旨とする所は専ら人情世態にあり。一大奇想の糸を繰りて巧みに人間の情を織做し、限りなく窮りなき隠妙不可思議なる原因よりして更にまた限りなき種々様々なる結果をしもいと美しく編いだしつゝ、此人の世の因果の秘密を見るが如くに描き出し、見えがたきものを見えしむるを其本分とはなすものなりかし。されば小説の完全無缺のものに於ては、画に画きがたきものをも描写し、詩に尽しがたきものをも現はし、且つ演劇にて演じがたき隠微をも写しつべし。蓋し小説には詩歌の如く字数に定限あらざるのみか、韻語などいふ械もなく、はたまた演劇、絵画に反してたゞちに心に訴ふるを其性質とするものゆゑ、作者が意匠を凝らしつべき範囲すこぶる広しといふべし。是れ小説の美術中に其位置を得る所以にして、竟には伝奇、戯曲を凌駕し、文壇上の最大美術の其随一といはれつべき理由とならむも知るべからず。（傍線西山）

つまり、「人情」という見えないものを描くのは難しいが、それをもっともよく行えるのが〈小説〉だという論理で、〈小説〉を「文壇上の最大美術の其随一」とする——〈小説〉の特権化を結論として引き出してくる。傍線部では、いちおう「文壇上」という言い方をしているが、その前のところでは「人情」を捉える難しさの点から、〈小説〉は「詩歌」のみならず「演劇」や「絵画」よりも優れているというところなどは、芸術全体の中で〈小説〉を頂点に押し上げようとしているようにすら思える節もある。

しかし、そうした特権化の評価基準となる“「人情」を描く＝〈小説〉のみならず「文壇」全体のテーマ”という〈小説〉・文学概念自体が、今見たようにかなり強引な経過をたどって析出されたものだった。それを覆い隠すかのように、逍遙は次の章——「小説の変遷」で、小説の特権性を今度は歴史的な角度から証明しようとする。そこではまず自らのいう「小説」が「ノベル」と呼ばれるもので、「世の人情と風俗をば写すを以て主脳となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料として趣向を設くるもの」で、「奇異譚」「寓言の書」「寓意小説」とは異なると、自らのいう〈小説〉概念をよりはっきりさせる。その後、その「小説」が成立するに至る歴史的変遷を述べてゆく中で、次のようにそれを特権化する。

さる程に奇異譚も其荒唐なる趣向を減じて、漸く世態の真相をば写しいださまく力むることは所謂進化の自然にして、抗すべからざるいきほひなれども、世の人情の陋うして嗜好十分に高尚ならざる文運半開の比にありては、小説作者も見識乏しく、自ら守るの

勇なければ、ひたすら流俗の時好を追ひて其物語を物することゆゑ、尚ほ小説の神髓をば修め得るには頗る遠かり。(中略)さあば真の小説稗史はいかなる時世に現はるゝぞ。其奇異譚と異なる所以はそもまた何等の辺にありや。曰くノベル即ち真成の小説の世に行はるゝは概ね演劇衰微の時にあり。故はそもいかにといふに、総じて文化の浅かりける未開蒙昧の世にありては、人皆皮相の新奇をよろこび、眼のつけどころ密ならねば、何にてもあれ異常にして少々注目を促すべき新奇の性質あるものあれば、競うてこれをもてはやして、面白きものと思ふは常なり。且つまた此比の人の情は今の人情とはおなじからで、怒りても喜びても、また哀みても楽みても、総じて頗る激切なれば、七情自から其挙動と其顔色とに見はれつゝ、隈なく人にも見られしなり。(中略)往昔は人の心も浅はかなるまゝに、七情残りなく外面にあらはれ、かつ異やうなる所も多かりしゆゑに、之れを演ずるに便なりしが、世の文運進むにつきて、事ごと物ごとに異やうなる性質は減じゆきつ。所謂「思入れ」のみにては、しつくしがたきものいと多なり。是れもまた演劇の漸く其位みを稗史、小説にゆづる所以とやいはまし。(中略)さてかくの如き進化を経て、小説おのづから世にあらはれ、またおのづから重んぜらる。是れしかしながら優勝劣敗、自然淘汰の然らしむる所、まことに抗しがたき勢ひといふべし。(傍線西山)

傍線を引いたところを見れば明らかなように、ここにあるのは生物的進化論の流用とともに社会を未開／文明に分けて考える、いわゆるスペンサー流の社会進化論的発想である。『小説神髓』における社会進化論の影響については、柳田泉『「小説神髓」研究』（『明治文学研究』第2巻、春秋社、1966・11）をはじめ、既に多くの指摘があるが、本稿では特にそれが〈小説〉の特権化において果たす役割に注目したい。これによって初めて、「文化の浅かりける未開蒙昧の世」のように、「人情」が「残りなく外面にあらはれ」ていた時代は、「奇異譚」や演劇でもよかったが、「世の文運進」んだ現在では、「人情」は外面に見えがたいものになったので、〈小説〉が世に現れ、重んじられるようになった、といえるのである。つまり、社会の進化した現在にふさわしい「高尚」な文学として〈小説〉が特権的な位置におかれ、それは「優勝劣敗、自然淘汰の然らしむる所」で「まことに抗しがたき」ことなのだ、と社会進化論をもってあたかも〈科学〉的に立証されたかのように語ることができるようになるのだ³。

3 当時、進化論や社会進化論はまさに西洋〈科学〉の象徴であった。「その後(明治七年以降——西山注)の日本へのダーウィニズム導入は、ほとんどこのタイプ、つまり、自分の気に入らない思想を、「科学」の理論であるダーウィニズムでやっつける、という形で行われることになる(中略)彼らは等しく“自然科学の理論”をもって自らの主張を武装しようと図った。あたかもそうすれば、自己の主張が自然科学的に立証された事実となるかのように。(村上陽一郎『日本近代科学の歩み』三省堂、1977・8)

3. 『小説神髓』に編みこまれた同時代の〈科学〉

実はこの「小説の変遷」の章は、主に『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第八版「ロマンス」の項の説明によっていることが、先の柳田泉前掲書ほか、森田実蔵『『神髓』における拮据—「小説の変遷」を中心に—』（『国語と国文学』1973・5）等により、既に明らかにされている。しかし、それを見る限り、上記のような社会進化論的発想をはっきりと指摘することはできないようだ。

The drama, then, had ceased to be the mirror in which the age could contemplate itself, and exhibited the license of masque, or the extravagance of a caricature, much more than the sobriety of actual life, or the fidelity of a portrait. Besides, there are many lesser traits of character, many sentiments and feelings, which are not at all dramatic, and which had therefore been overlooked by writers for the stage, yet in themselves highly interesting and curious, and capable, when judiciously employed, of exercising a strong influence on the feelings. These become more prominent, and stand out in brighter relief, as the restraints of civilization gradually throw into the background the wilder passions and more stormy impulses of our nature, until they acquire an importance which not only justifies, but renders their introduction into any fictitious narrative which represents the peculiarities of the time, necessary; and for this purpose, the calm and even march of the novel, and detailed development both of sentiment and incident which it allows, is found to be admirably adapted.(傍線西山)

たとえば、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第八版の上記のような部分を、逍遙は参照したと考えられるが、これを見る限り、多少傍線部などに「civilization」(文明)「wild(er)」(野蛮)といった言葉が見られるが、それが社会進化論により決定づけられたものとして提示されている様子はいかたがえない。

『小説神髓』における、こうした社会進化論の“編みこみ”は、進化論や社会進化論のブームが起きていた、当時の日本の知識階級の雰囲気によるのだろう。よく知られるように当時東京大学総長(当時は「総理」)だった加藤弘之が、後に「余は最初天賦人權主義を信じて(中略)『国体新論』以前の著書は、みなこの主義に依拠して論ぜしに、ようやく欧州新主義の学説を知り、かつはダルウィンおよびスペンセル等の進化論を知りし以来は、下等の動物より漸々進化して人類となれる吾人が、ひとり他の動物と異なりて天賦の権利を固有するということに疑いを生じ、爾来ますます研究を重ねるにしたがい、とうてい天賦権利の主義に一つの証拠なきを信ずることになりしかば、まづとりあえず、『人權新説』なる小冊子を著わして、従前の説とまったく反対せる説を公示したり」(傍線西山)と、『経歴談』(『太陽』明 29 [1896]・1~5)で自ら語るように、東大総長ですら思想的転向を強いられるほど進化論や社会進化論の影響力は大きかった。逍遙も東大でフェノロサや外山正一の授

業でそれらに触れていたことは、当時の『東京大学年報』中の「教授申報」からも推定される。つまり、逍遙はそうした知識階級における進化論や社会進化論のブームを背景として、それを通して『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の「ロマンス」の解説を読み取った。そして、それらを“編みこむ”ようにして上記の「小説の変遷」が書かれ、同時に〈小説〉の過剰な特権化が、あたかも社会進化論という〈科学〉的根拠により保証された事実のように、見せることも可能になったのだといえよう。

また、社会進化論以外にも、〈小説〉の特権化を保証するために“編みこまれた”ものは様々にあったと思われる。たとえば、「小説の変遷」の次の章「小説の主眼」では、次のような言葉も見られる。

稗官者(ここでは小説家のこと——西山注)流は心理学者のごとし。宜しく心理学の道理に基づき、其人物をば仮作すべきなり。苟にもおのれが意匠を以て、強ひて人情に悖戻せる、否、心理学に戻る人物などを仮作りいさば、其人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧みなりとも、其譚は奇なりといふとも、之れを小説とはいふべからず。

先に見たように『小説神髓』において、そもそも〈小説〉の特権化を成立させる上で重要だったのは、捉えがたい「人情」というもの、特に感情を表に出さない現代の「人情」という「描き難かるもの」を、〈小説〉は描くことができる、ということであった。それを保証するため、ここでは「稗官者流は心理学者のごとし」と、「心理学」というものが持ち出される。この「心理学」の影響に関してはさらなる検討が必要であり、また稿を改めたいが、この当時日本にもたらされたいわゆる連合心理学と呼ばれる、哲学から〈科学〉的手法に移行しようとしていた心理学の動きも、〈小説〉の特権化のために“編みこまれた”ものの一つだったといえよう。

以上が、逍遙の小説概念翻訳の現場で起こったことの、ある一シーンであったと思われる。そこに見られる〈小説〉の特権化は、同時代の〈科学〉を“編みこむ”ことにより支えられているのであり、冒頭の事典の言葉に従えば「方法としての近代写実主義」はいうに及ばず「近代文学史の起点」はこうして成立したのである。また、多少大袈裟に考えるならば、先に『小説神髓』における〈小説〉の特権化に対して違和感を感じるといったが、反面現代の文学をめぐる状況を見れば、たとえ逍遙のような「小説」ではないにしろ、多くの場合小説はその中心を占める特権的な位置に置かれているといえないだろうか。以上見てきたことは、小説概念翻訳の現場で起こったほんの些細な出来事かもしれないが、より大きな視野で見ればそうした現代まで引き継がれる、小説の特権化の一端として考えることができるかもしれない⁴。

⁴ 『小説神髓』に関する引用は、初刊本に即した『明治文学全集』16「坪内逍遙集」(筑摩書房、1969・2)による。また、加藤弘之『経歴談』は『日本の名著』34「西周・加藤弘之」(中央公論社、1972・1)による。ただし、ルビは必要のない限り省略し、また踊り字等横書きの形態に合わないものは、適宜修正を施している。